

営農情報

(イチゴ)

第115号 平成24年2月8日発行

J A 福岡大城

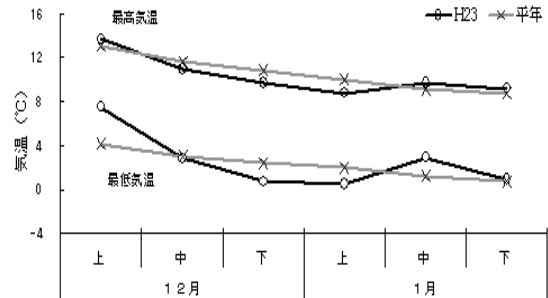
南筑後普及指導センター

12月中旬から1月上旬にかけての低温により、2番果房の成熟が進んでいない。2番果房の状況は、早期作型では、出蕾から3果収穫程度と非常にばらつきが大きく、普通ポットでは緑熟程度である。3番果房は順調に出蕾しているところが多い。

年明け以降、低温・成り疲れなどによりわい化傾向の（芯葉の伸びの弱い）ほ場が多くみられる。

今後は、2番果房の肥大促進と、3番果房の出蕾を促進する管理が重要である。2月後半は日照時間も長くなり、寒も徐々に緩んでくるため、急激に草勢が変化することがある。常に芯葉や生育状況を観察し、天候にも注意して、適正な草勢管理を行う。

病害虫では、うどんこ病、灰色かび病、菌核病、ハダニの防除に努める。またスリップスが発生しはじめる時期なので注意する。



久留米における旬ごとの気温

《温度管理》

温度管理が生育に最も影響を及ぼすため生育に応じた温度管理が必要となる。

3番果房が出蕾・開花するまでは高温管理とし、3番果房開花後は、品質向上のため、低めの温度とする。

曇雨天日が連続する場合は、「灰色かび病」対策として、日中はできるだけ換気や循環扇の活用により除湿し、夜間は暖房機が稼働するよう設定温度を行う。

	3番果房開花前	3番果房開花以降
昼間	24～26℃	20～24℃
夜間	5～7℃	5℃

《かん水・肥培管理》

乾燥と根傷みにより、一部でチップバーンの発生がみられる。かん水は、pF値1.7位を目安に、定期的実施し、暖かくなるにしたがって、徐々に多くする。灰色かび病などの多湿性病害が発生している場合はpF値1.8から2.0とやや控え、湿度を上げないようにする。

液肥は、1か月当たり窒素成分で2kg/10aを2回以上に分けて施用する。

➡ 例年、3月以降に先青果が発生しやすいほ場は、施用を控える。

➡ 3番果房の出蕾が遅れているほ場は、急な立ち上がりが懸念されるので、施用を控える。

《摘花・果梗と下葉の除去・芽の整理》

2番果房以降の着果数制限は、次果房への連続的な収穫を図るために行う。特に、今年度は3番果房が連続しているので、強めの摘花を行う。

【1枝当たりの着果数目安】

通常果梗：3～5果／枝
かんざし果梗：6～8果／枝



※ 果房の状況に応じて調整する

収穫が終了した果梗は、次の果房の早期出蕾を促進するため、早めに除去する。下葉は黄化葉のみ除去する。ハダニが発生している場合は葉かぎをしてから薬剤防除を行う。

3番果房以降、芽数を4～5芽に整理する。

《電照》

電照時間は、根の張り・着果負担の状況・天候および地力により変わってくるため、常に草勢（特に心葉の展開状況）を観察し、その後の生育を予想して、時間を調整する。

3番果房の出蕾初期には、点灯時間をやや長く設定して早期出蕾を促す。3番果房伸長後は徐々に時間を短くし、**芯葉の展開が外葉より高くなりかけたら**電照を終了する。（状況によっては収穫最盛期に電照を再開する）

【芯葉展開時の葉柄長と電照時間】

芯葉展開時の葉柄長	8cm以下	9～10 cm	12 cm以上	急に立ち上がる
電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く	終了

《病害虫防除》

(1) うどんこ病

今年度は発生が早く、現在でも完全には抑えきれていない。3月以降の多発期に向けて早期発見と予防防除が重要である。

(2) 灰色かび病、菌核病

換気や暖房機の稼働によりハウス内湿度を下げる。曇雨天の前には、予防防除を行う。

(3) ハダニ類

今年度は発生が多い。葉表面のかすれ症状が見えにくく、防除遅れが目立つ。2月上旬に防除を行うことで、春先の発生を抑える。

(4) スリップス類

年内にハウス内に飛び込み、産卵していた場合、2月頃より活動しはじめる。早期発見、防除に努める。

農薬の登録使用基準を遵守しましょう！